

保育者のための音楽基礎教育

——リズム把握に関する一考察——

菅ヶ谷 万花

中部女子短期大学

幼児を保育する立場にある者ならしくとも音楽に関して〈これだけのことはあきまえてほしい〉園児たちに〈これだけのことは身につけてやってほしい〉ということと述べたい。

基礎教育という音楽の基礎の限界を定義づけることはむづかしい問題である。私は短大保育科の学生を数年にあたって指導し、この四月にも多くの卒業生を現場に送り出そうとしているが、音楽に対する彼女らの能力は……、認識は……。その評価に迷ってしまうのである。ニヶ年という教育課程の中で彼女達は何と掴んで築立っていくのだろうか。能力の格差は致し方ないとしても、少なくともこれだけのことはできなければ……。これだけのことは知っていなければ……。と彼女たちを送り出すたびに後ろ髪を引かれる思いがするのである。

〈基礎力とは何か〉 保育者にとって厳然たる基礎目標が確立されていなければ必修教科としての音楽の意義は失われてしまう。

〈基礎目標の確立〉 それをいづれに求めるべきか。——課せられた宿命として自ら探り出さねばならぬ課題と思うのである。

逆れば大学以前の、高校の、更にそれ以前の幼児期から私達は確立された計画のもとに音楽学習の成果を積み重ねられてきたのであろうか。音楽的訓練の不徹底さをかこちながら、確固たる方針を持たぬままになされてきたその訓練の方法にも多くの疑問が残るのである。ピアノの巧拙が読譜力によるとはいえない。歌がうまいからといって音符がよく読めるとは限らない。演奏至上主義に代って音楽が教育の場に於て行われる場合、即ち音楽が教育として取り扱われる場合に於ては

その目標が抽象的な情操の陶冶の前提として科学的に立脚した〈読譜 記譜〉に置きかえられたことは時代の要請もさることながら指導目標の明示として画期的な意義と見出すものである。

殊に小学校の課程に於て〈読譜 記譜〉は音楽基礎として最近に至って重要な課題となり、これに伴う訓練が漸次広まりつつある。国語教育と同様読み書きができるようになって児童たちは初めて情操の域に到達し得ることが明示されたのである。私は決して情操陶冶を否定するものではない。たゞ情操に入るためにその段階を踏まねばならないという実に教育の意義と見出すのである。

小学校低学年の担当者たちは基礎の扱いに混乱と来たしているときく。そしてその責めをさかのぼって保育者が受けねばならぬことになりかねない。保育者の責任と痛感する次第である。

教(か)ずと教えること、歩数と教えることは教授法に於て左程の差異はない。要は指導者の音楽的教養によつて〈拍〉の認識と与えることは可能である。歩調に合わせて手を打つ保育者が果して〈拍〉を意識させるために手を打っているかが問題である。ピアノの学習で〈拍〉の認識は培われた筈のものであるが迂闊な演奏者よりも基礎を身につけた保育者ならたとえピアノは不得手でも自らの教育観念に立脚して〈効果的に〉手拍子を添えてくれることであらう。

〈拍の意識〉から子供たちはリズムを認識し、リズムの上に旋律が成り立つことと自ら会得していく。これらの体験なくして長じて楽典の講義を受けようとそれらはすべて無用の長物として放棄されるものとなる。

このように考えると「拍」を数えさせること自体が音楽基礎の根底となるべきものであつて、この最も単純な指導動作がそれを行う指導者の認識の度合によつて左右されていることを考える時「拍」の認識はピアノの巧拙にかかわらず保育者の脳裡に刻みこまれねばならぬ基礎教育の最も重要なものであると考えられる。

正統な音楽教育を受けた者なら「ソルフェージュ」という学習は耳新しい言葉ではない。演奏至上主義や情操陶冶を主張する教育観にまどわされて忘れられていたこの学習が時代の要求から再確認されるようになってきているのである。音楽専門の大学では衆知の教科であるこの学習が最も基礎教育と要求されている保育者養成の大学に取り入れられようとしていない点と我々は重視したい。このソルフェージュ学習を現状に即して現行の短大音楽のカリキュラムに如何に消化吸収していくか、云いかえれば音楽の基礎となるものを追究してその指導システムを確立したいと望んでいる次第である。

こゝに至つて私案を提案してみたいと思う。

すべての基礎は「リズム」であることは申すまでもないことであるが、問題はリズムの実体と如何に把握させるかという点である。拍みにくい音と素朴とする音楽においてリズムも同様その実体は中々把握しにくい。

♪と四分音符と命名することは自由である。しかしこれを「拍」と説明するところに問題がある。

如何なる説明をしようと「拍」に絶対的な価値はない。短い「拍」もあり長い「拍」もある。どこからどこまでが「拍」か。頭のない子供の方が迷ってしまう。「四分音符は1拍である」と答えれば答案としては合格する。しかし「4-7」式解答では幼児教育は成り立たない。

「足に合わせて手を打つことはできる。」

「1歩に対して 一と打ちである。」

「1歩の間に ニッ打てば ♪ となる。」

音符はすべて人間の作った符号であるからそれを見て手を打てばよいのである。問題は足に合わせて打つことが肝要であり、そのための訓練が必要となってくる。そして足と意識するためには歩数と数えることから着手せねばならない。これがリズム指導の原型ではなかろうか。

私はリズムも含めてすべて音は比較感によつて認識されるものであるという前提に立つて考えようとしている。

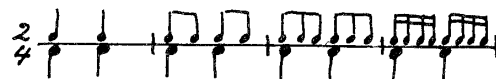
＜ そ の 一 ＞

足に合わせて手をニッづつ打ちなさい。

そうすると足と手の比率は 何対何になるか。

＜ そ の 二 ＞

次のリズム譜を右手と左手で（身体複合動作）打ちなさい。



すべてのリズムは拍の流れの中で認識される。

そのために「拍の確認」が先決である。

そしてすべてのリズムは「拍との対比」によつて把握されてゆく。（拍を区切るのが縦線であることにも）

音高の把握に「相対音感法」があるようにリズムの把握にも当然「相対リズム感法」が設定されてよいものと確信している。

殊にリズムの把握には基準となる「拍」が存在しておらねばならぬ。リズムと拍は表裏一体となることが音楽教育の根幹として学生に言ければ彼等らは難なく理解してくれると思う。

音楽はすべて比率の原則の上に成り立つものである。